灌佛の話

村尾節三

灌佛は毎年四月八日に、釋迦牟尼佛の生誕の日、沐浴せし儀に倣ひて、其像に香水を灌くよりの稱にて、又佛生會、浴佛會、龍華會とも云ひ、俗間にてはお釋迦の誕生とも云へり、推古天皇の御宇より始まれりと云へと慥ならず、仁明天皇の承和七年四月八日に、律師傳燈大法師靜安を清涼殿に請して灌佛の事を行へり、此より以後恒例の儀式となり是日若し神事に當らば停止し、杜本當麻大神祭等の使を立つる日に當らば使を立つる事を翌日に延引して、灌佛の儀を行へり、朝廷にては、紫宸殿の母屋の御簾を垂れ、畫の御座を撤し、その跡に、山形二基を立て、糸にて瀧を落し、金色釋迦佛像一體を金銅盤の上に安置し、黑漆案の上に白銅鉢一口銀鉢四口を置き、五色の水を入る、公卿始め女房等の布施を供へ、御導師の僧佛前の作法終り、鉢の水を一に汲み合せて佛に灌ぐ、次で公卿次第に進みて灌佛して禮拜す、院宮より大臣武家に至る迄行へり、寺院にては、花御堂とて卯花等にて飾れる小堂中に銅像の釋迦を安し、參詣者をして甘茶を小柄杓にて佛頂に灌がしむ、是日京都にては、花の塔とて、躑躅及び卯花を竿の先に結付け、九輪の塔の如くにし、戸外に立て、江戸にては、卯花を戸外に挿すの俗ありしが絶えたり、又甘茶を墨にすり、千早振卯月八日は吉日よ神さけ虫をせいばいぞすると云ふ歌の、虫の字のみを倒に書きて、廁等に張置けば、毒蟲を除くとの俗信あり、兒童の甘茶を飲むは禁ずべきことなれど、灌佛の儀は存したけれ。